農村集落における住民の居住環境評価からみた 地域資源認識に関する研究

A Study on recognition of regional resources by residents' evaluation
of their residential environment in rural settlement

斎藤 亮司^{*}, 藍澤 宏^{*}, 北島 千寿^{**}

Ryoji Saito^{*}, Hiroshi Aizawa^{*}, Tizu Kitajima^{**}

(^{*}東京工業大学, ^{**}ビーコンコミュニケーションズ)

(^{*} Tokyo Institute of Technology, ^{**} beacon communications k.k.)

I はじめに

1. 研究の背景と目的

現在、農村地域では、生活環境向上のための道路整備、公共施設の整備等が進み、居住者の日常の購買活動や趣味活動等の生活活動が充足してきている。しかし一方で、農林業の停滞や就業の場を求め、若年層を中心とした人口流出や人口の高齢化が顕著に見られる。その結果、地域住民により昔から維持・保全されてきた森林や経済面を担ってきた生産農用地等の荒廃が進み、不十分な管理状況の集落環境になっている地域が、増加しつつある。

この様な状況下では、集落環境の環境整備の展開として、住民の集落の地域資源に対する価値観をもとに、新たな環境管理の計画的な方法を求めることが重要な課題である。

地域資源を研究の対象とし、集落環境整備や地域活性化に関する既研究では、集落に存在する地域資源の賦存量と活用内容により集落間を総体的に比較し、地域的な特徴を示す集落毎に地域資源活用^(注1)の方向性を求めたものや地域資源の活用状況に対する指標を用いて集落内の資源活用に対して住民各人が如何に評価しているかを捉えているものがある。しかし、実際に住民各人の価値観に基づき大切なものであると評価できるものや適切な

維持・管理が求められているものを抽出することで、集落に存在している地域資源の活用状態を把握し、居住環境の向上に向けた地域資源活用の方向性を求めた論文は少ない。

そこで本研究では、能動的に集落の活性化に取り組んでいる農村集落を対象とし、住民各人の価値観のもと、日常の生活・生産活動を通じ、目にしている地域資源に対する認識状況を捉え、集落環境の整備課題や適切な管理が求められる環境要素を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の方法

研究の方法は、日常の生活の中で住民が目にし、個人の価値観のもと重要性を認識している集落環境の内容を直接的に把握するため、インスタントカメラを被験者に渡し、自分の目を通して、集落内の中でその状態の良さから評価できるものと管理状態や活用状況が適切でないと感じているものの双方を抽出してもらう方法を用いた。この時、被験者には、評価対象物に対する判断尺度として「大切なもの」、「みっともないもの」^(注2)の2つを設定し、評価対象物を撮影してもらった。

この様にして得られた評価対象物は、集落に存在している地域資源の存在状況を表しており、その性質と内容により集落環境を構成する環境要素として整理する。そして、集落環境の構成する枠組みを、生産・生活活動の基盤的な資源として、Ⅰ農業生産資源とⅡ人・活動資源、生活基礎資源

としてⅢ施設資源、Ⅳ自然環境資源、Ⅴ文化伝統資源の計5分野を設定した。

次に、評価された各環境要素に対する住民の評価をもとに、如何なる事項を集落の資源として認識しているか、また、どの程度、集落全体の環境を認知しているかを把握する。

以上の結果より、住民の居住環境に対する認識の特徴を捉えることで、環境整備の課題や改善方向を明らかにする。

研究の手順は、第一に、住民が集落環境の中で何を地域資源として認識しているかをみるため、住民の視点で評価した全評価対象物をその内容と性質により集落環境を構成する環境要素として整理し、集落毎に存在する各環境要素に対する住民評価の割合と存在位置を集落地図上に示す。

第二に、住民の集落環境に対する評価の特徴をえるため、住民属性を集落社会における立場を考慮し、①集落生活における経験則の違いからの年代別、②従来からの家・地域で担う役割の相違からの性別、③集落環境評価に対する考えに影響を与える経験則として集落外生活経験の有無、の3つの属性を設定し、「大切なもの」と「みっともないもの」のそれぞれに該当する各環境要素を評価した人の割合と重要度評価の関係を把握する。

第三に、各住民の地域資源認識からみた集落環境評価の領域性の特徴を明らかにするため、評価対象物が存在している領域を被験者の自宅を中心として、①自宅周辺、②集落の中心部、③集落の周辺部、④集落からの遠景、の4つの領域区分を設定し、それぞれの領域内で存在する地域資源分野毎に評価した人の割合を属性毎に捉える。

なお、調査概要は表1に示す。

表1 調査概要

○調査対象地／1998年度に青森県十和田三戸地域の全集落を対象に実施した地域資源の賦存状況調査の結果を受け、安定した営農展開がなされており、更に、伝統的な地域行事や地域組織等の資源も豊富に存在している以下の3集落を選定した（注5）。	
・南部町 集落A ・田子町 集落S ・三戸町 集落T	
○調査期間／1999年11月	
○配布票数／各集落20票 計60票（小学生以上の集落居住者）	
○有効回答数／45票（75.0%） ○有効写真枚数／793枚	
○質問項目	
27枚撮りのインスタントカメラと調査票を渡し、集落の中で「大切なもの」と「みっともないもの」を撮ってもらう。写真一枚毎に以下の項目について調査票に記入してもらう。	
Ⅰ：題名（被験者が評価対象物を撮影した理由）	
Ⅱ：重要度（「非常に」「どちらかという」とのどちらかを選択）	

Ⅱ 住民の地域資源認知からみた地域資源の存在状況

全評価対象物を写真の内容と住民各人が付けたタイトルにより図1の様に集落環境を構成する環境要素として整理した。この各環境要素に対して、集落毎に被験者の何割が評価したかを捉える。更に、各集落で抽出された代表的な環境要素の存在状況を被験者の撮影した写真を用いて集落地図上に示した（図2, 3, 4）。

図1 環境要素に対する集落別の評価

図2 集落Aの地域資源の存在状況

図3 集落Sの地域資源の存在状況

図4 集落Tの地域資源の存在状況

1. 集落共通の住民の地域資源認識

各集落共通で「大切なもの」であると多くの住民に評価されているものは、田畑の風景等の農業生産資源を中心に、集落の文化的な資源である神社や大木、良好な自然風景に対する評価が集中している。また、「みつともないもの」については、集落の中心部を通る生活道路上のゴミの不法投棄等であり、集落の周辺部では田畑の耕作放棄や農業廃棄物の処理の悪さ等を捉えている。

全体的な特徴として、3集落とも居住環境を構成する各環境要素の維持・管理状態や自然環境開発による環境の状態変化により、住民の環境評価が左右される。

2. 各集落の住民の地域資源認識

各集落の特徴として、集落 A では、集落の境界部を流れる河川の風景を構成する様々な要素に対してその良い部分と悪い部分を共に評価している。集落 S では、遠くに見える山並みや城の風景、集落の中心部ある集落の共有施設や集落から見える町営施設に対し大切と評価している。集落 T は、集落から見える自然環境の風景や地域のシンボルである城を大切であると評価している。

また、各集落で共通に存在している環境要素の内、特に共有施設に対する評価は、3つの集落で大きく異なり、集落Aでは、集会所や消防器具置き場、農業関連施設を大切なものとして評価している人が少ない。

Ⅲ 住民の地域資源評価

1. 大切なものに対する住民評価

「大切なもの」として評価された各環境要素に対する重要度と認知度との関係を属性毎に図 5 に示す。

年代別の特徴として、加齢に従い集落全体を対象とした景観を評価対象とする人は多いが、その重要性まで高く評価している人は少ない。子供や高齢者に比べ、積極的な清掃活動への参加姿勢を示している世帯主層や若年層は、子供達が外で遊んでいる様子や祭りの風景等の人・活動資源を評価対象としている割合が高い^(注6)。

性別では、主に男性が集落の周辺部に存在する

農用地を媒介とした農業生産環境や自然環境への重要性を感じ多くの人が大切であると評価している。特に共有施設の清掃を行っている女性は、児童館や小学校、地域の文化施設等の共有施設や地域施設を評価対象としている人が多い。

居住経験別では、集落の出身者で他地域での居住経験がある人達は、田畑や小学校、川や神社等、住民の多くがその価値を認めている環境要素に対して評価が集中している。

この様に住民が日常的に利活用している物やシンボル性のある物に対する評価は高いものの、日常目にする機会のあまりない環境要素を評価の対象としている人は少なく、その必要性や重要性を認識していない傾向が見られた。

2. みっともないものに対する住民評価

「みっともない」に関しても上と同様に、属性毎の特徴を図6に示す。

年代別では、集落で実施する清掃活動へほとんど参加していない10代や20・30代の若い人達は、ゴミ置き場や共同墓地等の集落共有の物や管理主体が地域住民のものに対して管理の悪さを指摘する人が多い。また、用水路や道路の清掃活動に関わっている人が多い20・30代や40・50代の人々は、生活道路上のゴミの不法投棄を非常にみっともないものとして捉えた人が多い。子供達や高齢者は、田畑の未利用状態や管理面の悪さを指摘している。

性別では、生活道路や用水路の清掃活動にほとんどの人が参加している男性は、生活道路上のゴ

図5 大切なものからみた属性別の地域資源の認識状況と重要度評価

図6 みっともないものからみた属性別の地域資源の認識状況と重要度評価

ミの不法投棄に対して、どちらかというとみっともないと評価しているが、女性の多くは、非常にみっともないものとして捉えている。

居住経験別では、結婚を期に移り住んできた人達は、田畑の維持・管理の悪さや耕作放棄地に対して非常にみっともないと捉え、集落外に居住経験がない人は、認知度はあまり高くないが多くの環境要素でみっともないものを挙げている。

以上の様に、自分自身の集落生活における立場や役割によって、みっともないとして評価対象とする地域資源の内容や評価の度合いが異なる。

Ⅳ 住民の地域資源の認識領域

1. 大切なものからみた地域資源認識の領域

まず、属性毎に「大切なもの」の地域資源分野とその領域区分との関係を図7に示す。

年代別の特徴として、10代や60歳以上の人は、全ての地域資源分野において自宅周辺にあるものあまり評価せず、集落の中心部や周辺部に存在する様々な地域資源を評価し、内容が多岐に亘る。また20・30代や40・50代は施設資源分野の道路や防火水槽等の生活環境設備や自然環境資源に関しては、各領域区分において高く評価している。以上の様に、地域資源の内容により、各世代が認識している領域は異なっており、特に子供や高齢者は集落内の中心部やその周辺部に存在する細部の物までを多く認識している。

性別では、男性は施設資源や自然環境風景に対して、自宅周辺から集落から見える遠景まで連続して評価している。女性は、集落の中心部で活動している人々の活動風景や集落外での集落住民の活動風景を評価している。

居住経験別では、集落出身者で集落外居住経験がある人は、農業生産資源分野を除いて、多くの資源分野において集落外に存在するものまでを評価対象の領域としており、集落内と並行して集落外にも目を向けている。

2. みっともないものからみた地域資源認識の領域

属性毎に「みっともないもの」の地域資源分野とその位置属性との関係を図8に示す。

年代別の特徴として、10代と60歳以上の人達

は、農業生産資源や自然環境資源、道路やゴミ置き場などの生活関連設備に対して、集落内の中心部やその周辺まで目を向けている。

性別では、女性が男性に比べ、集落の中心部に存在する田畑等の農業生産資源をみっともないとマイナス評価し、その維持・活用に対する要望が高い。また、男性は、自宅周辺部に位置するものを多く評価しており、領域として自分の身近な部分に目を向けている。

集落外での居住経験別では、結婚を期に移り住んできた人達は、大切なものの場合とは対照的に、集落外の地域施設や自然環境に対してマイナス評価の対象としており、集落の外部までを評価の領域としている。

図7 属性別の資源認識領域(大切なもの)

図8 属性別の資源認識領域(みっともないもの)

以上の様に、住民の集落に対する評価の視点の広がりを捉えた結果、評価対象とする領域が地域資源の内容毎に属性間の違いが見られ、特に子供や高齢者層は、多くの地域資源分野において集落の隅々まで目を向けている。

V まとめ

①集落の大切なものを評価する住民の視点として、集落や地域の固有のものやシンボル性のある地域資源に対して多くの住民がその価値を共有しており、特に集落の出身者で集落外での居住経験のある人達の評価が高い。

②集落のみっともないものを評価する住民の視点として、評価対象物が個人所有の田畑、行政が管理する河川の護岸整備や山林開発等にはあまり評価が厳しくはないが、集落住民の共有物であるゴミ置き場や共同墓地、川や里山等に関しては、その管理状況に対して厳しい目で捉えている。

③住民の地域資源評価の特徴として、集落環境の清掃管理活動における役割や集落社会に対する立場を反映して、評価対象とする地域資源の内容やその評価の程度が異なる。

④住民が客観的に集落環境を如何に認識しているかを捉えた結果、子供達や高齢者層は、集落内の様々な場所に位置する環境要素を評価対象としているが、若者や中年層は、日常目にする機会が多い一部のものを評価する結果が得られた。

以上のことから、住民各人の視点からプラス評価だけでなくマイナス評価についても把握することは、集落環境の現状を捉える有効な手段となり、適切な環境整備の内容を示す結果となる。更に、環境整備活動に参加していない子供達や若年層にも主体的な参画を促し、各世代の意見や考えのフィードバックと収斂化を図ることは今後の重要な検討課題と考えている。

[注]

注1)①藍澤宏ほか(1996):「集落立地類型からみた地域資源構造と集落誘導の方向性-農村地域における地域資源からみた集落誘導に関する研究その1-」、日本建築学会論文報告集、No484, pp. 137-146. ②藍澤宏ほか(1998):「一

般集落と推奨集落との相違からみた地域資源による集落誘導-農村地域における地域資源からみた集落誘導に関する研究 その2-」、日本建築学会論文報告集、No507, pp143-149.

注2)①藍澤宏ほか(1999):「中山間地域における居住者の地域資源評価からみた集落の誘導要件-農村地域における地域資源からみた集落誘導に関する研究 その3-」、日本建築学会論文報告集、No518, pp197-203.

注3)本研究では、視覚的に捉えられる地域資源の利活用方法を明らかにする論文であり、時間や時期・季節等に依拠する内容や地域の年中行事や地域組織等の全ての地域資源を把握することは行っていない。

注4)「大切なもの」は維持すべき環境要素であり、「みっともないもの」は改善すべき環境要素を示す用語として設定している。

注5)藍澤宏ほか(2001):「農村地域における地域資源の賦存状況からみた資源分布構造に関する研究」、日本建築学会論文報告集、No548, pp145-152.

注6)同調査対象集落で別途に行ったアンケート調査をもとに、集落で実施している清掃活動に対する被験者の活動参加状況と活動意識を属性毎に把握した。結果、年代別では、40代以上のほとんど人達は、整備活動に参加しているのに対し、子供や若い人は参加している人があまりいない。性別では、特に違いは見られないが、男性は主に環境面の清掃活動に参加し、女性は施設面の維持・管理を担っている。居住経験別では、特に大きな差異は見られない。

	年代別		性別		集落外居住経験別	
	70代	50代	50代	100代	50代	100代
川や里山(自然環境)	●	●	●	●	●	●
道路や川の水(生活資源)	●	●	●	●	●	●
廃品回収	●	●	●	●	●	●
の会や神社(施設情報)	●	●	●	●	●	●
西も参加していない	●	●	●	●	●	●
清掃活動に遠くまで参加	●	●	●	●	●	●
凡例	10代 ● 20・30代 ● 40・50代 ● 60代以上		● 男性 ● 女性		● 経験なし ● 聞いた ● 戻ってきた	

[参考文献]

1) 石川宏之ほか(2000):「地域資源に対する川崎市民の保全意識の形成に関する調査研究」、日本建築学会技術報告集、No. 10, pp. 203-208.

As a result of residents' having grasped how the village environment which people live their everyday lives is directly caught for their eye by letting it pass, the contents of action of the residents in everyday life have influenced local resources evaluation greatly, and evaluation of the habitation environment which was based on the life style accomplishes. Furthermore, each one of residents' position is made to reflect maintaining their environment, and it becomes an important plan subject that the residents themselves recognize the overall situation of colony environment by urging active participation to each generation.